

## 山代・木崎窯と永楽和全

藤 井 尚 行

本稿は永楽和全も関係したことがあると伝えられる山代の木崎窯の窯跡を昭和42年8月発掘調査した調査報告である。

木崎窯については川良雄編「やましろ」昭和33年8月5日山代公民館発行に次の如く云っている。

「木崎ト什は文化7年(1810)3月20日2代清右衛門の次男に生れ、初名重蔵後ち清右衛門と称し、号をト什と云つた。文政8年(1825)京師に遊んで狩野画を学び同10年(1827)18才の時諸国を遊歴し、有田唐津に至つて陶画を学び、同12年(1829)20才に及んで京師に帰り、再び清水に遊び天保2年(1831)22才の折帰郷した。当時兄平兵衛は故あつて出でて木崎本家を相続していたから、重蔵はその年清右衛門を襲名3代を相続し、山代新村庄道の自宅庭内に窯を築き、赤絵を發明し、緻密な紋襷を画き金彩を施した製陶に従つた。実に九谷赤絵は是から始つたのである。嘉永元年(1848)法橋に叙せられト什と名を給わり、仁和寺宮御室御所の出仕となり隔年に参入した。

木崎万亀はト什の長男として天保5年(1834)に山代新村に生れ、初名清与門、後清右衛門と称した。幼より家業を父ト什に受け嘉永4年(1851)18才を以て木崎家4代を継いだ。万延元年(1860)藩主前田利暲公の命により京都の名工永楽善五郎和全に師事し陶技を磨いた。文久元年(1861)法橋に叙せられ万亀と名を給わり仁和寺御室御所の出仕となつた。翌文久2年(1862)父ト什が天保2年自宅庭内に築いた窯を春日山に移し次いで其の地を藩主利暲公より給わり更に庭宅をも此処に移し居住した。製品は八郎平風の絵を描き二重輪内に「木崎」の押銘印及び「大日本於九谷木崎造之」の赤書がある。」

また木崎窯と永楽については同書に「安政年間(1954)衰退した九谷焼を大聖寺藩物産役所は山代村の三藤文次郎、藤懸八十城に命じ資金を与え製陶に従事させたが製陶の技術は難中の難事にして目的達成は覚束なかつた。両名は熟考の結果木崎清右衛門と相談、藩士東方芝山に乞い藩公に建言京都より名工永楽善五郎和全を招聘することに決定した。慶応元年(1865)3カ年という藩の招きで山代に来住、門弟万亀の春日山窯で九谷焼改良に努め、万

亀の家で寝食を共にした。」とある。

調査結果、発掘した窯は加賀市山代町にある春日山といわれる中腹の南側に面したなだらかな傾斜面である。窯の内側の寸法は2mに3mの6平方mの(図.1)ものである。窯の天井がそのまま下の方に落ち、その厚さが約30cmあり匣鉢の破片等入れてつくられているのは現在のもとは変わらない。使用された煉瓦は縦23cm、横15cm、高さ6cmでこれよりやや小さいものも使われていた。焚口は判然としないが窯の周囲から焚口と思われる煉瓦の組合つたものが出ているので多分薪を投げ入れたところと思われる。発掘された破片は白釉をかけた磁器のもので、高台裏には「於九谷永楽造」(図.2) (径4.5cm)、「花鳥(図.3)「慶応年製」(図.4)の染付で描かれたもの、木崎の丸印(図.5)の外安南、絵高麗風(図.6)のもので全て薄手であり、形状は破片ではあるがあざやかである。又(図.7)の様に倣作されたものも出ている。窯の構造等まだ残された問題もあり、近く再調査の予定であるが、今回の調査で和全が山代に於ては方々で焼いたと云はれているが春日山で在銘の破片が出たので立証される、今後永楽については貴重な資料となる。